

2023年10月の第十六回シノドス（世界代表司教会議）けて

2022年度に、私たちは「第二バチカン公会議開幕60周年」という記念すべき時期を迎えました。そして、ローマ・カトリック教会共同体は2023年10月および2024年10月にも開催されることになる第十六回通常シノドス（世界代表司教会議）に向けて各教区の全成員を挙げて準備に余念がありません。なぜならば、現在、教皇フランシスコは教会共同体の在り方を刷新して見直すために特に「シノドス性」（協働性、ともに歩むという性質、旅する神の民の歩み、聖霊の働きに促されてキリストとともに歩みつつ御父へと向かう教会共同体の道行き）を強調しているからです。

教皇フランシスコは16世紀に活躍したイエズス会の創立者の聖イグナチオ・デ・ロヨラの『靈操』（キリストと出会うための黙想の指導書）による靈的指導の経験に基づいて、現在の教会共同体が、果たして第二バチカン公会議が目指していた理想の教会共同体に合致しているのかどうかを慎重に見究めようと努めており、もしもずれがあるとすれば刷新しなければならないと考えています。

教皇フランシスコはこれまでの通常シノドス（世界代表司教会議）を踏まえたうえで、「シノドス的な方法論」を提唱しています。

「最も重要なのは、私たちがそれぞれ違う点をもちながらも、共に同じ道を前進することを可能にするハーモニーなのです。このシノドス的アプローチこそ、世界がいま、切実に必用としているものです。相手を倒そうと対立や闘争に向かうのではなく、それぞれの違いを表に出し、互いに耳を傾けたうえで成熟に向かっていけるプロセスが必要なのです」

（教皇フランシスコ『コロナの世界を生きる』PHP研究所 114頁）

第十六回通常シノドス（世界代表司教会議）の主題は「シノドス性」（イタリア語で「シノダリタ」、英語で「シノダリティー」）です。「シノドス性」とは邦訳することが困難な

ほどに多様で豊穡なる意味を担う術語であります、「教会の生活と使命における協働性」に基づいて敢えて邦訳すれば、「教会共同体を形作る性質」または「協働性」あるいは「共同体の全成員がキリストとともに福音的な道を歩むという性質」と言えるでしょう。

「シノドス」の原意はギリシャ語の「シュン」（ともに）と「ホドス」（道）という語が複合して「ともに道を歩むこと」という名詞を形成してることになります。

ヨハネ福音書 14 章 16 節の文脈でも明らかなように、「道」は「キリスト」ご自身を指し示しますので、「シノダリティー」という術語からは「キリストという道においてキリスト者同士が支え合ってともに歩む」という意味がおのずと浮かび上がってくるでしょう。

（ 『『キリストと共に』 阿部仲麻呂 オリエンズ宗教研究所 76～78頁』参照 ）